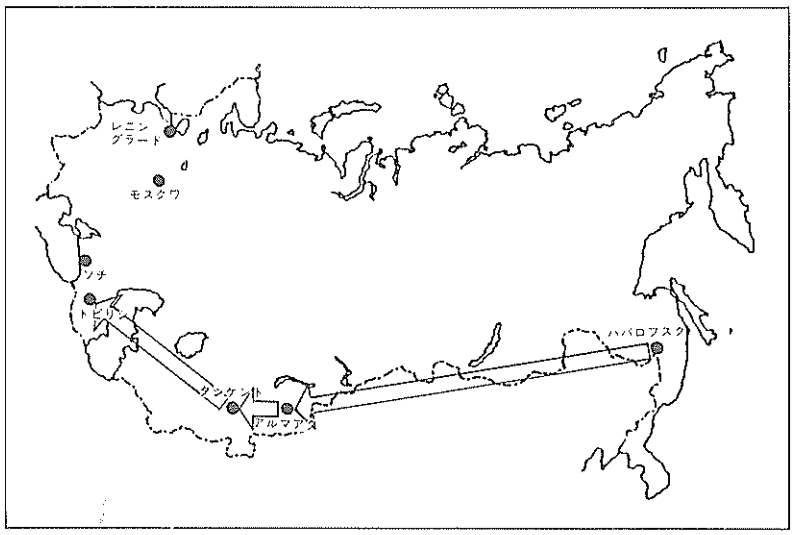
# ソ連見たまま・・・(1)

今井成子（東崎）

私はこの度夫の勧めで、自費でソ連に行く機会を得、老人福祉について多くを学ぶことができたので、その実情をお話ししたいと思います。




社会主義の国と資本主義の国とでは国柄が違いますが、社会主義の国における老人福祉の制度はすばらしいものです。教育、医療はただという国柄ですので、病気になったときの心配は全くありません。年金で生活は保障されていますから、悪いことをする必要もありません。十五日間を通して心に染み込んだことは、一貫して人間を大事にする国であるということで、私はうれしくなりました。きらびやかさはないけれども、生活の心配のない、落ち着いた人々の心の豊かさと美しいひとみがありました。

私たち一行（二十人）は老人福祉を視察する目的で訪れたので、まずカザフ共和国のアルマアタで長寿学者と懇談しました。その際、九十歳以上の方や百歳を超える方五人が家族といっしょに来て、日常生活についてそれぞれ語ってくださいました。皆さんとてもお元気で、自分の身の回りのことはもちろん、洗濯や買い物にも出かけ、一家の長として尊敬され、その豊富な経験と知識は子孫に語り伝えられています。

九十八歳のおばあさんに「一生を通じて一番感激されたことは」と質問すると、「息子が二人戦争に行ってしまい、そのうちの一人は残念ながら戦死しましたが、もう一人が帰ってきたときは、うれしくて、うれしくて、やっぱり平和でなければ」とはっきりと答えてくれました。どこの国でも母親の気持ちは一緒だと胸が熱くなりました。

同席された長寿学研究所の所長は七十八歳の女性教授リジア・レオンチワさんですが、まだまだ仕事もできるし本も書きたいと目を輝かせていました。女は五十五歳、男は六十歳から年金がもらえますが、どうしても仕事を辞めなければならないということではなく、年金と給料を合わせて三百ルーブルを超えない額が支給されるそうです。化学工場や冶金工場など、健康に有害な仕事をする人には十年早く支給されることになっています。

グルジア共和国のスフミでは、人口十二万人のうち百歳を超える老人は二千人、八十歳、九十歳は現役とのことです。ここでは長寿研究所の所長さんらが私たちを迎えてくださいました。同席した百二歳のおじいさん、九十八歳のおばあさんと話しましたが、二人ともとてもお元気で、おじいさんは畑仕事、おばあさんは買い物、洗濯もしていると聞き、その若さに驚きました。さすがに生活に心配のない国、病気になっても心配のない国だと思いました。自然な形で老いていくのです。

アルマアタで開かれた懇談会

研究所の長寿学者ゴゴヒア、ダラキシビリ両博士は「長寿とは人間のつくれる最高の芸術」とも、「人間は百五十歳まで生きられる」とも断言しています。長寿研究が学者の間でも積極的に進められ、私たちが行く前日には国際的なシンポジウムも開かれたと聞きました。日本で一番問題になっている老人ボケや寝たきり老人について質問する人もありましたが、ソ連ではそうした問題はほとんどなく、神経性の病気もないので、自殺などないと不思議そうな顔で答えていました。（つづく）

今井成子さんは九月二十六日から十月十日までの十五日間、「ソビエトの社会福祉を訪ねて――コーカサスの旅」の一員としてソ連の老人福祉を視察してきました。今回から数回にわたって、現地での体験などを紹介します。